

第 5 回熟議『学校選択制』（7 月 11 日）A グループ 主な意見とまとめ

【主な意見】

3 選択できる学校の範囲

- 大阪では小さな区が比較的多いので、選択制は自由しかないのかと思う。小さな区でブロック選択制や隣接区域制にすると、1 校しか選べないところと 3 校選べるところの差が出てしまう。
- ここの区は自由選択で、その隣の区は隣接とかブロックになるとややこしい。
- ある区は選択制を入れる、ある区は選択制を入れないもありえるので、いろんなパターンが発生することとなる。
- 自由選択制、ブロック選択制、隣接区域制ぐらいに絞られるのではないかな。
- 小学生で 30 分以上歩いて通学するというのは無理がある。
- 小学校と中学校では条件が変わる。
- 小学校 1 年生が 2 キロ以上歩くのはすごくきつい。
- 小学校で 2 キロとか 30 分以内とか、中学校で 3 キロということは選択制の形態よりも少し上位の検討課題である。
- 中学生の通学は徒歩に限るのかどうか。自転車はダメでも、これだけ交通機関が発達している。
- 小学生は隣接区域ぐらいが適当だと思うが、隣の校区の端から来るとなってもかなりの距離になる。区が小さく選びようがないという場合、自由選択制もあっても良いと思う。
- 東京の 1 区と大阪の 1 区は 10 分の 1 ぐらいの差があるので、東京のブロック制と大阪のブロック制は違う。大阪の場合は隣接と変わらない。徒歩圏何キロ以内と決めたほうが大阪では現実的である。
- 区ごとに制度を決めるのであれば、区またぎは無しになる。徒歩何分、何キロというのが主になる。
- 自由度をどれだけ高めようかという中で、区内で隣接制をやったとして、区を越えたら行けないとなると、区の端の人は行けるところがない。指定外基準を設けると区の境界ギリギリの人は別の区も行けるようになるが。調整区域にするのかどうかも含めて、指定外のところで再度議論する。
- 低学年の子どもの歩く速度は遅い。校区内でも 30 分歩いても学校に着かない。
- 徒歩 30 分の時間を設ける標準の測り方や目安がわかりにくい。
- 距離と時間の両方を入れたほうが良い。
- 小学校低学年の足での限界は 1.2 キロ、1 キロでも長いのではないかな。
- 基本、中学生も距離と時間の制限は置いておいたほうが良いと思う。電車に

乗って行っても良いとなると、親の経済力で選べる子と選べない子が出てくると不公平である。

- 中学校は近くのところも行けるし遠いところも行けるような枠組みで、遠いところは自転車以外の交通機関という中で、責任を持って家庭でもらったら、クラブ活動で行きたい子もあると、自由でないと意味が無い。
- 教室を確保しないと習熟度が出来ない。習熟度というのは分けて勉強するので、何ヶ所か無いと出来ない。全部選択制に当ててしまうと習熟度をする部屋が無い。教室に余裕のない学校は、選択制をやるとしても、全部無理というようなことも考えられる。
- 中学校の場合、通学区域、通学距離の制限を外してもっと広く自由にやったら良いと思う。
- 中学生になると、個性が出てくるので部活だとか勉強だとか音楽だとか、もともとの指定校に行きたくないというのものもあるかもしれない。
- 自由選択制、ブロック選択制、隣接区域選択制などいろいろな形態があるがそのひとつ上位規範として小学生は2キロとか1.2キロとか30分ということが必要になってくるのではないか。

4 各学校の受け入れ

- 通学区域はきちんと維持しながら進んで行くということでは、その学校がいくら自由選択制、フリーとしても地元の方でもう一杯ということもあれば、実質難しいということになる。
- 受け入れ人数の計算は、事前の調整が非常に大変で複雑になるという問題点を抱えている。
- 学校選択制と越境はまた別の話ではないか。
- 学校側の課題意識としてもものすごく困るのは、最後までクラス数もある程度微妙なところで決まらないとなると、教職員定数が変わり、学級1学級によって2人変わったりする場合も出てくる。

5 学校選択のための情報提供

- 中学校で、サッカー部があるからこの学校に入れたが、サッカー部の先生が転出して、サッカー部が無くなってしまったということも起こりうる可能性がある。
- 東京の資料を見たが、保護者が見てこの中学校とこの中学校の違いがどこにあるのかわからない。
- 私立でのプレゼンテーションの方法は、その学校の生徒さんがしている場合もある。うちの学校はこんな特徴があって、こんな先生がいてこんなことをやってくれるという説明をする。パンフレット1枚ホームページに公開し

て年1回更新して、そのホームページだけで判断というのではない。

- 情報提供の冊子で学校の教え方などを出すというのは難しい。最終的に学校公開しかないのではないか。
- 学校の先生の姿勢をひとつの情報として出していかれると判断材料となる。
- 先生の取り組みの濃さというのは一番知りたいところだと思う。
- 学校の情報提供というのはそれほど簡単ではない。いいところを出してオープンにすればいいのではないと思う。
- オープンスクールは、運動会とかを見たら一目瞭然でわかるのではないか。私学がよく行う文化祭、体育祭など、ある程度やっていけば選ぶほうも見やすいし、この学校こんなに良いとかがわかるので、良いことはもっと取り入れてはどうか。
- 区をまわっているとあんな学校選択しませんと言われるが、実際通っている保護者に聞くと、そんな時代は終わったと話される。いかにマイナスを少なくしたか。これもプラスだと思う。風評被害とか噂で選ばれるのを非常に危惧する。情報公開、情報提供をちゃんとしてと積極的に先生たちもとらえていただいて、ぜひともこれは頑張っていたきたいと思っている。
- 保護者が欲しい情報と、学校が出せる情報がミスマッチだということが一番問題である。
- 土曜参観でも土曜に仕事の方もいる。その点にも配慮して1週間の間は見に来て良いというように、学校からどんどん情報を発信していくことがひとつの選択設計のキーになれば良い。
- A・B両方見ないといけないから、複数で開催していかないといけない。年に何回か、オープンスクールでも何でも良い。一斉にこの日となると1校しか見れない。
- 長崎市が学校選択制をやめたのは高台の学校に子どもが来ないという理由で、長崎市もいろんな情報を出している中で、結局、それよりも高台はしんどいから平地にあるところの学校を選ぼうというようなところで、偏りが出来たのでやめます、という。そこに一番問題があるのではないかと思う。だから学校公開をして、たぶん熱心な保護者はこっちの学校、あっちの学校を見て、どこがどう違うのかを見て決めると思うが、見にも来ないでもうここでもいい、というのであれば本当に意味が無いのではないか。
- 保護者の意識としては、随分変わってくるのではないかと思う。

その他

- この制度を始める議論をしたときに、何年先に見直しというのもどこかでかけておく必要があると思う。何年後かに1回見直すというような検証、それを区長がするのか教育委員会がするのかという点も押さえておきたい。